

§12. ガロア対応の例

例 12.1 (\mathbf{Q} 上の 2 次拡大) \mathbf{Q} 上の 2 次拡大体 L はガロア拡大であり, $\alpha \notin \mathbf{Q}$ である $\alpha \in L$ をとれば, $L = \mathbf{Q}(\alpha)$ である. α の \mathbf{Q} 上の最小多項式を

$$f(X) = X^2 + bX + c \quad (b, c \in \mathbf{Q})$$

とする. したがって, α は

$$\frac{-b + \sqrt{b^2 - 4c}}{2}, \quad \frac{-b - \sqrt{b^2 - 4c}}{2}$$

のどちらかであり, どちらにしろ, $L = \mathbf{Q}(\sqrt{b^2 - 4c})$ である. 有理数 $b^2 - 4c$ の分母を s とすれば, $s^2(b^2 - 4c) \in \mathbf{Z}$ かつ $L = \mathbf{Q}(\sqrt{s^2(b^2 - 4c)})$ でもあるから,

$$L = \mathbf{Q}(\sqrt{m}) \quad (m \in \mathbf{Z})$$

と表すことができる. ここで, もし m が平方数 l^2 で割れて $m = l^2 m'$ ならば $L = \mathbf{Q}(\sqrt{m'})$ とできる. そこで, はじめから m は平方因子を持たない, つまり

$$m = -1 \text{ または } \pm p_1 p_2 \dots p_r \quad (p_i \text{ は相異なる素数})$$

と表される整数であるとしてよい.

さて, \sqrt{m} の \mathbf{Q} 上の共役元は, \sqrt{m} , $-\sqrt{m}$ なので, 定理 6.12 より, 2 つの同型写像, すなわち $\text{Gal}(L/\mathbf{Q})$ の元で

$$\sqrt{m} \mapsto \sqrt{m}, \quad \sqrt{m} \mapsto -\sqrt{m}$$

をみたすものが存在する. 前者は恒等写像 $\text{id}_L (= 1 \text{ と略す})$ である. 後者を σ とすると, $\sigma(\sqrt{m}) = -\sqrt{m}$, より詳しく

$$\sigma : L \rightarrow L, \quad a + b\sqrt{m} \mapsto a - b\sqrt{m} \quad (a, b \in \mathbf{Q})$$

となっている. ここで,

$$\sigma^2(a + b\sqrt{m}) = \sigma(a - b\sqrt{m}) = \sigma(a + (-b)\sqrt{m}) = a - (-b\sqrt{m}) = a + b\sqrt{m}$$

より $\sigma^2 = \text{id}_L = 1$ が成り立っている. 以上をまとめて, 2 次拡大 L/\mathbf{Q} のガロア群として位数 2 の巡回群

$$\text{Gal}(L/\mathbf{Q}) = \{1, \sigma\}$$

が得られたことになる.

例 12.2 (\mathbf{Q} 上の 4 次アーベル拡大 (ただし巡回拡大でない) \mathbf{Q} 上の拡大体

$$L = \mathbf{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$$

を考える. $\alpha = \sqrt{2} + \sqrt{3}$ とおけば, $L = \mathbf{Q}(\alpha)$ と書ける. $\sqrt{2}, \sqrt{3}$ の \mathbf{Q} 上の共役元は, それぞれ $\pm\sqrt{2}, \pm\sqrt{3}$ だから, α の \mathbf{Q} 上の共役元は $\pm\sqrt{2} \pm \sqrt{3}$ (複号任意) のどれかである. 一方, $|\text{Conj}(\alpha, \mathbf{Q})| = [L : \mathbf{Q}] = [\mathbf{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}) : \mathbf{Q}] = 4$ だから,

$$\text{Conj}(\alpha, \mathbf{Q}) = \left\{ \sqrt{2} + \sqrt{3}, -\sqrt{2} + \sqrt{3}, \sqrt{2} - \sqrt{3}, -\sqrt{2} - \sqrt{3} \right\}$$

でなければならない. これら 4 つの共役元はあきらかに $L = \mathbf{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$ に属する (このことは

$$-\sqrt{2} + \sqrt{3} = \frac{\sqrt{3} - \sqrt{2}}{\sqrt{3}^2 - \sqrt{2}^2} = \frac{1}{\alpha}, \quad \sqrt{2} - \sqrt{3} = -\frac{1}{\alpha}, \quad -\sqrt{2} - \sqrt{3} = -\alpha$$

からもわかる) ので, L/\mathbf{Q} は正規拡大であり, したがってガロア拡大である (標数 0 なので分離拡大である). G をガロア群とする; $G = \text{Gal}(L/\mathbf{Q})$. L/\mathbf{Q} の中間体

$$M_2 = \mathbf{Q}(\sqrt{2}), \quad M_3 = \mathbf{Q}(\sqrt{3})$$

に対応する G の部分群を H_2, H_3 とする. すなわち

$$H_2 = \text{Gal}(L/M_2), \quad H_3 = \text{Gal}(L/M_3),$$

または, これらと同値だが

$$M_2 = L^{H_2}, \quad M_3 = L^{H_3}$$

が成り立っている.

$$[L : M_2] = \frac{[L : \mathbf{Q}]}{[M_2 : \mathbf{Q}]} = \frac{4}{2} = 2, \quad [L : M_3] = \frac{[L : \mathbf{Q}]}{[M_3 : \mathbf{Q}]} = \frac{4}{2} = 2$$

より, H_2, H_3 はどちらも位数 2 の群, したがって巡回群である. そこで, それらの生成元をそれぞれ $\tau, \sigma \in G$ とする;

$$H_2 = \langle \tau \rangle, \quad H_3 = \langle \sigma \rangle.$$

$\sqrt{2} \in M_2$ かつ M_2 は H_2 の不変体だから, $\tau(\sqrt{2}) = \sqrt{2}$ である. ここで, もし $\tau(\sqrt{3}) = \sqrt{3}$ だとすると, L 全体が H_2 で不変になるから, $M_2 = L^{H_2} = L$ となって矛盾する. よって $\tau(\sqrt{3}) = -\sqrt{3}$ でなければならない. H_3 についても同様に考えて,

$$\begin{aligned} \sigma(\sqrt{2}) &= -\sqrt{2}, & \sigma(\sqrt{3}) &= \sqrt{3}, \\ \tau(\sqrt{2}) &= \sqrt{2}, & \tau(\sqrt{3}) &= -\sqrt{3} \end{aligned}$$

したがって

$$\sigma(\alpha) = -\sqrt{2} + \sqrt{3}, \quad \tau(\alpha) = \sqrt{2} - \sqrt{3}$$

を得る. ここで, $\sigma \neq \tau$ はあきらかだが,

$$\begin{aligned} \sigma\tau(\alpha) &= \sigma(\tau(\alpha)) = \sigma(\sqrt{2} - \sqrt{3}) = -\sqrt{2} - \sqrt{3}, \\ \tau\sigma(\alpha) &= \tau(\sigma(\alpha)) = \tau(-\sqrt{2} + \sqrt{3}) = -\sqrt{2} - \sqrt{3} \end{aligned}$$

より, $\sigma\tau = \tau\sigma$ が成り立つ. したがって G はアーベル群である. また, $\sigma\tau$ は σ とも τ とも異なる G の元である. G の位数が体次数 $[L:\mathbf{Q}] = 4$ と一致することに注意すれば,

$$G = \{1, \sigma, \tau, \sigma\tau\} = \langle \sigma, \tau \rangle$$

と表され, 位数 4 のアーベル群であることがわかる. さらに G は位数 4 の元をもたないから巡回群ではない. 加法群 $\mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ は位数 2 の巡回群 (生成元は $\bar{1} = 1+2\mathbf{Z}$) であり, 同型写像

$$\delta: G \longrightarrow \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$$

が

$$\delta(\sigma) = (\bar{1}, \bar{0}), \quad \delta(\tau) = (\bar{0}, \bar{1})$$

によって与えられる.

例 12.3 (\mathbf{Q} 上の 6 次非アーベル拡大) α を $X^3 - 5$ の実数根とし, ω を 1 の原始 3 乗根とする ($\omega = e^{\frac{2\pi i}{3}}$ と思ってよい). アイゼンシュタインの定理より, $X^3 - 5$ は \mathbf{Q} 上既約, したがって α の \mathbf{Q} 上の最小多項式である. さらに

$$X^3 - 5 = (X - \alpha)(X - \alpha\omega)(X - \alpha\omega^2)$$

だから, $\text{Conj}(\alpha, \mathbf{Q}) = \{\alpha, \alpha\omega, \alpha\omega^2\}$ であって, $X^3 - 5$ の \mathbf{Q} 上の最小分解体 L は

$$L = \mathbf{Q}(\alpha, \alpha\omega, \alpha\omega^2) = \mathbf{Q}(\alpha, \omega)$$

で与えられる. L/\mathbf{Q} のガロア群を $G = \text{Gal}(L/\mathbf{Q})$ とおく. 中間体 $K = \mathbf{Q}(\alpha)$ および $F = \mathbf{Q}(\omega)$ について

$$[K:\mathbf{Q}] = 3, \quad [F:\mathbf{Q}] = [\mathbf{Q}(\sqrt{-3}):\mathbf{Q}] = 2$$

に注意する (後者は ω が $X^2 + X + 1$ の根, すなわち $(-1 \pm \sqrt{-3})/2$ であることからわかる). このことから, $[L:\mathbf{Q}] = 6$, したがって G の位数は 6 であることもわかる. いま, $K = \mathbf{Q}(\alpha)$ に対応する G の部分群を H とし, $F = \mathbf{Q}(\omega)$ に対応する G の部分群を N とすると,

$$|H| = [L:K] = \frac{[L:\mathbf{Q}]}{[K:\mathbf{Q}]} = \frac{6}{3} = 2, \quad |N| = [L:F] = \frac{[L:\mathbf{Q}]}{[F:\mathbf{Q}]} = \frac{6}{2} = 3,$$

したがって、 H は位数 2 の巡回群、 N は位数 3 の巡回群である。それぞれの生成元を τ, σ とする；

$$H = \langle \tau \rangle, \quad N = \langle \sigma \rangle.$$

ここで、 $\tau(\omega) = \omega^2$ である。実際、そうでないとすると $\tau(\omega) = \omega$ だが、 $\alpha \in K$ より $\tau(\alpha) = \alpha$ でもあるから、 $L = \mathbf{Q}(\alpha, \omega)$ が H の不変体となって矛盾する。一方、 $\sigma(\alpha) = \alpha$ とすると、今度は L が N の不変体となって矛盾するから、 $\sigma(\alpha) = \alpha\omega$ または $\alpha\omega^2$ である。後者の場合、

$$\sigma^2(\alpha) = \sigma(\alpha\omega^2) = \sigma(\alpha)\sigma(\omega)^2 = \sigma\omega^2\omega^2 = \alpha\omega^4 = \alpha\omega$$

であって、かつ $N = \langle \sigma^2 \rangle$ でもあるから、 σ^2 をあらためて σ とおくことによって

$$\begin{aligned} \sigma(\alpha) &= \alpha\omega, & \sigma(\omega) &= \omega, \\ \tau(\alpha) &= \alpha, & \tau(\omega) &= \omega^2 \end{aligned}$$

であるとしてよい。このとき、

$$\begin{aligned} \tau\sigma(\alpha) &= \tau(\alpha\omega) = \alpha\omega^2, & \sigma^2\tau(\alpha) &= \sigma^2(\alpha) = \alpha\omega^2, \\ \tau\sigma(\omega) &= \tau(\omega) = \omega^2, & \sigma^2\tau(\omega) &= \sigma^2(\omega^2) = \omega^2 \end{aligned}$$

より $\tau\sigma = \sigma^2\tau$ が示される。次に、定理 11.1 より、

$$\begin{aligned} \sigma K &= \mathbf{Q}(\sigma(\alpha)) = \mathbf{Q}(\alpha\omega) \text{ に対応する部分群は } \sigma H \sigma^{-1} = \langle \sigma\tau\sigma^{-1} \rangle, \\ \sigma^2 K &= \mathbf{Q}(\sigma^2(\alpha)) = \mathbf{Q}(\alpha\omega^2) \text{ に対応する部分群は } \sigma^2 H \sigma^{-2} = \langle \sigma^{-1}\tau\sigma \rangle. \end{aligned}$$

さらに、 $\tau^2 = \sigma^3 = 1$ と $\tau\sigma = \sigma^2\tau$ を使えば、

$$\sigma\tau\sigma^{-1} = \sigma^2\tau, \quad \sigma^{-1}\tau\sigma = \sigma\tau$$

および

$$G = \langle \sigma, \tau \rangle = \{1, \sigma, \sigma^2, \tau, \sigma\tau, \sigma^2\tau\}$$

が成り立つことがわかる。したがって、 G は 3 次対称群 S_3 と同型な非アーベル群である。 F/\mathbf{Q} は 2 次ガロア拡大だから、 $N = \langle \sigma \rangle$ は G の正規部分群である。実際、

$$\begin{aligned} \tau^{-1}\sigma\tau(\alpha) &= \tau\sigma(\alpha) = \tau(\alpha\omega) = \alpha\tau(\omega) = \alpha\omega^2 = \sigma^2(\alpha), \\ \tau^{-1}\sigma\tau(\omega) &= \tau\sigma(\omega^2) = \tau(\omega)^2 = \omega^4 = \omega = \sigma^2(\omega) \end{aligned}$$

より、 $\tau^{-1}\sigma\tau = \sigma^2 \in N$ 、よって $\tau^{-1}N\tau = N$ が成り立つ。一方、 K/\mathbf{Q} はガロア拡大ではないから、 H は G の正規でない部分群である。